

口バに 耳打ち

中島らも



講談



【著者】中島らも 1952年、兵庫県尼崎市に生まれる。大阪芸術大学放送学科を卒業。ミュージシャン。作家。主な著書に、『明るい悩み相談室』シリーズ、『僕に踏まれた町と僕が踏まれた町』『超老伝』『人体模型の夜』『白いメリーさん』『永遠も半ばを過ぎて』『アマニタ・パンセリナ』『寝ずの番』『バンド・オブ・ザ・ナイト』『らもちち わたしの半生 青春篇』『同・中年篇』『お父さんのバックドロップ』『空のオルゴール』『ロカ』『こどもの一生』『君はフィクション』などがある。『今夜、すべてのバーで』で第13回（平成4年）吉川英治文学新人賞を、『ガダラの豚』で第47回（平成6年）日本推理作家協会賞（長編部門）を受賞した。2004年7月26日、転落事故による脳挫傷などのため死去。享年52。

ロバに^{みみう}耳打ち

なかじま
中島らも

© Miyoko Nakajima 2013



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

2013年1月16日第1刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

本文データ制作——講談社デジタル製作部

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社若林製本工場

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277455-0

第一章 出っ歯の男

幼時の記憶

8

ナイトメア

11

ナイトメアⅡ

14

歌うこわっぱ

17

駄菓子屋の暗闇

19

プチ・ブルの優雅な生活

21

何の魚

24

街の点描

27

親父

30

空手チョップで一丁あがり

33

鬼

35

出っ歯の男

38

スクリーンに雨傘

40

土筆摘み

43

あの日の風景

45

五百万?!

48

高い酒、安い酒

51

夢の土地

54

スッテンコロリン

57

一升酒を飲む

60

第二章 象が目染みる

河内長野に笑死する	64
世界で一番強い男	67
竹林にクマ死す	70
クマ対ヒト	73
気の毒なサル	76
三畳一間に夫婦が二人	79
夏かほる	82
湖の酒	85
引越せガンジー	88
映画の話ちらほら	91

でかい家と豊かな家	94
ロックンローラーと食べ物	97
世界のうどん	100
フルメタル・ジャケット	103
象が目染みる	106
ノミの心象	109
スカトロジック・ホスピタル	112
お茶汲みおばさんのこと	115
寄生虫、退院する	119
スカトロジック・ホーム	122

第三章 もんじゃのくるしみ

川口さんのこと

忘れ物

苦いコーヒー

コピー講座のこと

蛇喰い

事の優劣

三十路のうつ病

もんじゃのくるしみ 月島の風情 その一

白一本に黒二本 月島の風情 その二

恐怖のカビ人間 月島の風情 その三

『なにわのアホちから』 月島の風情 その四

129
126

135
132

141
138

147
144

153
150

156

習いごと その一「催眠術」

習いごと その二「柔道」

習いごと その三「ロック」

必殺のチャーハン

トリスが呼ぶナマコ

虎のネクタイ

最後の尻肉

十晚中七晩

本という宝石箱

ワールドワイド版『エキゾティカ』

159

165

172

178

184

162

168

175

181

187

附録 お悩み相談

191



講談社文庫

常州大学図書館
蔵書打章

中島らも

講談社

第一章 出っ歯の男

幼時の記憶

8

ナイトメア

11

ナイトメアⅡ

14

歌うこわっぱ

17

駄菓子屋の暗闇

19

プチ・ブルの優雅な生活

21

何の魚

24

街の点描

27

親父

30

空手チョップで一丁あがり

33

鬼

35

出っ歯の男

38

スクリーンに雨傘

40

土筆摘み

43

あの日の風景

45

五百万?!

48

高い酒、安い酒

51

夢の土地

54

スッテンコロリン

57

一升酒を飲む

60

第二章 象が目染みる

河内長野に笑死する	64
世界で一番強い男	67
竹林にクマ死す	70
クマ対ヒト	73
気の毒なサル	76
三畳一間に夫婦が二人	79
夏かほる	82
湖の酒	85
引越せガンジー	88
映画の話ちらほら	91

でかい家と豊かな家	94
ロックンローラーと食べ物	97
世界のうどん	100
フルメタル・ジャケット	103
象が目染みる	106
ノミの心象	109
スカトロジック・ホスピタル	112
お茶汲みおばさんのこと	115
寄生虫、退院する	119
スカトロジック・ホーム	122

第三章 もんじゃのくるしみ

川口さんのこと

忘れ物

苦いコーヒー

コピー講座のこと

蛇喰い

事の優劣

三十路のうつ病

もんじゃのくるしみ 月島の風情 その一

白一本に黒二本 月島の風情 その二

恐怖のカピ人間 月島の風情 その三

『なにわのアホぢから』 月島の風情 その四

129
126

135
132

141
138

147
144

153
150

156

習いごと その一「催眠術」

習いごと その二「柔道」

習いごと その三「ロック」

必殺のチャーハン

トリスが呼ぶナマコ

虎のネクタイ

最後の尻肉

十晩中七晩

本という宝石箱

ワールドワイド版『エキゾティカ』

159

165

172

178

184

162

168

175

181

187

□
バに耳打ち

編集協力・小堀純

第一章 出っ歯の男

幼時の記憶

おれは赤ん坊の時、母親の乳房を吸った記憶がある。

その時の母親の顔とかの記憶はなく、ただふくよかな乳房がおれに向かってくるというものであった。おれは乳房の真ん中に吸いつき、そのあとのことは覚えていない。

背景に十段ほどある木の棚があった。その棚の中には、色とりどりの薬が入っていた。もちろん乳児であるから、それが薬であるとは知る由もない。後年になってからそれが薬であると、見当づけたものであろう。

おれは長い間このことをだまっていた。だが十歳になったある日、母親に話してみた。母親は非常に驚いて、

「三〇四カ月の子供に、そんな記憶があるわけがない」と言いはった。

しかしおれが背景の薬の棚の話をする、

「それはあんたが三つまで住んでいた、尼崎の入江の家だ」
と言った。

母親は父親にそのことを話して、

「そんなことはありえないでしょう」

と言った。父親は少し考えた末に、

「いや、そういうこともあるかもしれません」

「どうしてです」

「三島由紀夫は、自分が産道から生まれる時のことを、覚えていると言ってます。だから生後三カ月のことを覚えていても、別に不思議ではないのでしょうか」
後に小学校に入って勉強してみると、おれは自分の記憶力が異常に鋭いのに気づいた。

「明治維新が一八六八年」

と、教科書にあれば、一読してそれを半永久的に覚えてしまう。そのうちに友達
が、

「記憶の中島」

と言つて寄つてくるようになった。

ただし、小学校、中学校くらいが記憶の最盛期であつたようで、後年に三十五歳でリリパット・アーミーという劇団を作つた頃には、「記憶の中島」が「忘却の中島」になり果てていた。生後三カ月のあの記憶力がよみがえつてほしい。

今では昼喰つた飯が何だつたかも忘れてゐる有様だ。

ナイトメア

尼崎にある小さな家は、一階が診療所、二階二部屋がおれと兄の寝室、夫婦の寝室。それに小さな台所がついていた。

当時（一九五〇年代）歯医者は非常に儲^{もう}かるという風評が、巷に流れていたが、それは本当のことである。それが一九七〇年代になって、歯医者が増えすぎ、いわば買手市場になってしまった。

ところでこの家の寝室でおれは初めて、「恐怖」というものを味わった。

これはうまく表現できないのだが、ふとんに入って天井を見上げていると、天井から光の帯が降りてくるのである。ちょうどオーロラのような感じだ。そのオーロラのような帯がおれに非常な恐怖の念をもたらすのだった。

なぜ光の帯なのか、なぜお化けではないのか、今になってみればわかるが、恐怖とというのは何者かに仮託^{マツプ}するものであるからだ。当時のおれは、その仮託する相手を知

らなかった。だから抽象的な光の帯になったわけである。

光の帯はいつも夜の十二時すぎに現われた。おれは身体を硬直させ、冷や汗を流し、金縛りに遭って、身動きできなくなった。

それがいくつか年をとると、仮託していた恐怖の感情の根源のようなものが、具体的な形をとって現われるようになり、その具体的な形というのは、

「カカシ」

であつた。

上の方の村人たちが恐怖に歪んだ顔をして、走り降りてくるのである。そのとたん村は無人の村となる。逃げ遅れたのは、おれだけだ。しばらくすると山の上から、

ぴょーん

ぴょーん

と、音がして、カカシが降りてくる。カカシは村に人々のいないのを見定めると、おれの方に向かって、ぴょーん、ぴょーんと近づいて来るのである。

読者諸兄は笑っておられるだろうが、その時の恐怖と云ったらない。

そういえばアメリカのホラー映画で、タイトルは忘れたのだが、カカシをモンスターに仕立てた作品があつた。読者諸兄も嘘だと思つたら、十日間カカシと一緒に暮ら